



南葵音楽文庫ミニレクチャー

本居長世 人と作品

～歌曲「白月」と童謡作品をめぐって～

林 淑 姫

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500

2019年4月20日(土) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)



本居長世(もとおり ながよ)



本居長世と娘たち

(右から) みどり、喜美子、若葉



『金の船』1920(大正9)年9月号

本居長世(一浩、長豫)

1885(明治18)年4月4日～1945(昭和20)年10月14日

東京下谷に生まれる。祖父本居豊穎(1834・1913。和歌山本居家第四代当主)のもとで育つ。東京高等師範附属小学校、獨協中学を経て、東京音楽学校に入学。1908(明治41)年本科器楽部(ピアノ)を首席で卒業。1910年助教授就任(ピアノ、和声学担当)とともに、邦楽調査掛調査員を務める。本科卒業の頃より作曲を始め、ピアノ曲「数へ歌ヴァリエーション」(1909)、オペレッタ「歌遊び うかれ達磨」(1912)などで高い評価を得た。1920(大正9)年より童謡雑誌「金の船」(「金の星」)に童謡作品を発表。野口雨情とのコンビにより「十五夜お月さん」(1920)、「七つの子」「青い目の人形」「赤い靴」(1921)などの名作を残す一方で、わらべうたの研究にも手を染め、宮城道雄、吉田晴風らとともに「新日本音楽」運動を起した。

本居長世は近世邦楽の音階や旋律法に工夫を凝らし、西洋音楽の技法を駆使することによって新しい作品世界を表出した。歌曲「白月」(1921)、童謡「十五夜お月さん」(1920)など一連の作品に特徴的に見られるその手法は、鋭敏な言語感覚を下敷きにした日本語歌詞の扱いとともに、作品に独特の陰影と情感を与えている。

1909年慶應義塾長で紀州徳川家相談役でもあった鎌田榮吉夫妻の媒酌により結婚。妻幸枝との間にもうけた3人の娘たち一みどり、喜美子、若葉一は歌唱にすぐれ、ステージをはじめレコード、放送にも活躍、のち戦後にかけて続出する「童謡歌手」たちの先駆となった。長世の童謡のほとんどは愛娘によって初演されている。

終戦の年の秋、肺炎により死去。享年60。作品は声楽曲を中心としておよそ650曲が確認されている。

紀州徳川家と親しく、東京音楽学校助教授時代に頼貞、治兄弟にピアノ、和声を教え、治急逝の折に合唱曲「涙の幣」を捧げている(ケンブリッジで初演)。1915年1月の頼貞帰国記念音楽会は彼の最初の作品発表会でもあった。

「十五夜お月(十五夜お月さん)」

初出 『金の船』1920(大正9)年9月号

初演 1920年11月27日「新日本音楽大演奏会」(有楽座)

本居みどり独唱、本居長世ピアノ伴奏

十五夜お月（十五夜お月さん）

野口雨情詩

十五夜 お月さん

ご機嫌さん

婆やは お暇（いとま）とりました

十五夜 お月さん

妹は

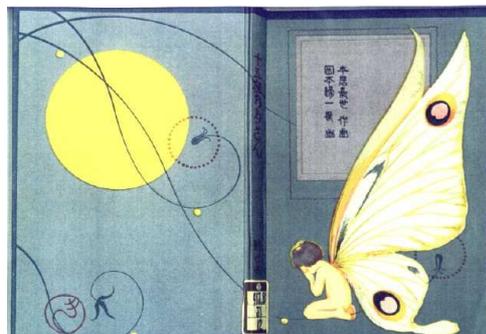
田舎へ貰（も）られて ゆきました

十五夜 お月さん

母（かか）さんに

もいちど わたしは 逢（あ）ひたいな

（1920年9月発表）



初版 尚文堂 1921年6月刊 岡本帰一装幀

汽車ポッポ（汽車ぽっぽ）

童謡漫曲

本居長世詩

お山の中行（ゆ）く 汽車ぽっぽ
ぽっぽ ぽっぽ 黒い煙（けむ）を出し
しゅしゅしゅしゅ 白い湯気（ゆげ）ふいて
機関車と機関車が 前引き 後（あと）押し
なんだ坂 こんな坂
なんだ坂 こんな坂
トンネル 鉄橋 ぽっぽ ぽっぽ
トンネル 鉄橋 しゅしゅしゅしゅ
トンネル 鉄橋 トンネル 鉄橋
トンネル トンネル
トン トン トンと のぼり行く
（1927年5月作曲 7月2日 JOAK 放送 本居若葉独唱、長世ピアノ伴奏）



初版 シンフォニー楽譜出版 1927年6月刊

白月（はくげつ）

三木露風詩

照る月のかげ満ちて

雁がねの棹（さお）も見えずよ

我（わが）思ふ果（はて）も知らずよ

たゞ白し秋の月夜は。

ふく風の音冴えて

秋草の虫がすだくぞ

何やらん心も泣くぞ

なき明（あか）せ、秋の月夜は。

（1921年9月作曲）

*タイトルの読みは「しろつき」とも。

歌曲「白月」

初出 『婦人之友』15巻9号（1921年9月） 詩とも（左掲の詩は初出による）
初演 1922年2月12日 新日本音楽大演奏会 長坂好子独唱
初版 白眉出版社 1922（本居長世新民謡6）
作曲者解説「エレジーを歌うような心地で、清澄に寂しく」（『世界音楽全集7 日本独唱曲集』 山田耕作編 春秋社 1929）

【試聴音源】「関定子が歌う日本の抒情 うぬぼれ鏡」
Troika, TRK 107. p1997

【参考文献】金田一春彦『十五夜お月さん 本居長世 人と作品』（三省堂 1983.3）小島美子『日本童謡音楽史』（第一書房 2004.10）、ほか